The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 一九四三年五月-八月 アッツ島玉砕をめぐる文学場・文学者の動向 |
| Author(s) | 松本, 和也 |
| Citation | 太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 24-27 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/57178 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼5月

・12日、米軍、アッツ島に上陸。

・29日、日本軍守備隊、アッツ島にて、二五〇〇人玉砕。

▼7月

・10日、連合軍、シチリアへ上陸。

・29日、日本軍、キスカ島より撤退。

▼8月

・23日、米英軍、ベルリン重爆撃。

## 一九四三年五月――八月　アッツ島玉砕をめぐる文学場・文学者の動向／松本和也

この期間における最大の出来事は、アッツ島部隊の玉砕である。それは、戦局の展開上、重要であることは当然として、大本営発表をはじめとした報道（のタイミング）の問題でもあれば、文学者にとってはその出来事／報道をどのように捉え、いかにして言語化するかという文学的課題でもあり、総じて表象をめぐる問題系を集約した出来事であった。

その検討に先立ち、この期間の文学場における動向を三点ほど確認しておこう。

一つめは、火野葦平を中心とした戦争小説の発表である。火野は『陸軍』連載（「朝日新聞」一九四三・五・一一～一九四四・四・二五）を開始した他、「オロンガボの一日」（六月、「八雲」）『真珠艦隊』（七月、朝日新聞社）、『ヘイタイノウタ』（七月、成徳書院）が著されている。ここに、里村欣三「青年将校」（「中央公論」八月）などもくわわる。

二つめとしては、徴用作家による外地をモチーフとした作品の発表があげられる。最も精力的に作品を発表したのは、ビルマに行った高見順で、「シッタン河を渡る」（「日の出」五月）、「戦場の童謡」（「新太陽」五月）、「袖しぐれ」（「新潮」五月）、「ノーカナのこと」（「日本評論」六月）などを書き継いでいった。他にも、榊山潤『ビルマの朝』（六月、今日の問題社）、大江賢次『ジャワを往く旗』（七月、朝日新聞社）、富澤有為男『ジャワ文化戦』（七月、日本文林社）などが上梓されている。

最後に三つめとして、やはり前後する時期の動向を集約した評論集の上梓があげられる。板垣直子『現代日本の戦争文学』（五月、六興商会出版部）が出版される一方で、矢崎弾『近代自我の日本的形成』（七月、鎌倉書房）や山本健吉『私小説作家論』（八月、実業之日本社）がまとめられている。前者は時代のわかりやすい反映だが、大正期以来の〝古い〟テーマにみえる後者も、昭和一六年以降、歴史小説（言説）と私小説（言説）とが理念的な近接を果たしていたことを想起すれば、コインの両面ということでもあるはずだ。

以上を総じて、アジア・太平洋戦争が、特定の文学者にではなく、それぞれの曲率を以

【社会】

▼5月

・26日、中央公論社社員木村亨ら四人、富山県泊町で細川嘉六と共産党再建謀議の容疑で逮捕される（横浜事件）。

▼6月

・4日、閣議、戦時衣生活簡素化実施要綱決定。

・10日、警視庁、国民徴用令関係違反者七七六人を検挙。

・25日、閣議、学徒戦時動員体制確立要綱を決定。

▼7月

・1日、経済市況の放送中止。

▼8月

・12日、中央電力調整委員会、電力消費規制実施方針要綱を決定。

---

て文学者個々人の立場・資質にまで着実に食いこんでいる様相が確認できる。

では、アッツ島部隊の玉砕をモチーフとした文学場の動向に目を転じてみよう。

まずは、新聞報道を参照してみたい。アッツ島の戦闘自体は、「敵アッツ島に上陸／わが軍邀撃奮戦／キスカ島に敵影なし」（「読売新聞」五・一五）といった報道以降、（必ずしも日本軍優位ということではなく）膠着した戦況が折々報じられていった。実際は、五月一二日から始まった戦闘は一七日間つづき、ついに二九日に日本守備隊は玉砕する。そのことは、「アッツ島に皇軍の神髄を発揮／山崎部隊長ら全将兵壮絶・夜襲を敢行玉砕／敵二万・損害六千」（「朝日新聞」五・三一）、「アッツ島の我守備部隊二千数百名全員玉砕す／皇軍の神髄ここに発揮」（「読売新聞」五・三一）といった見出しで、三一日付けの紙面から報じられていく。この間、文学者も新聞紙上で発言していく。吉川英治は「アッツの死闘こそ天意の指揮刀だ　悲涙に誓え邁進の心」（「朝日新聞」五・三一）において、「このアッツ島のことを見ることは、我我の悲涙を踏んで立つた勇壮をいよいよ猛ならしめてくれる天意の指揮刀だとも思ふ」と述べた。また、斎藤茂吉は「神の御軍　アッツ島の忠魂に捧ぐ」（「朝日新聞」六・一）と題して、以下の五首を詠んだ。

守備隊の死憤のつひの突撃を泣かむ涙に加護あらせたまへ
この島に二千ためらふことなくて神の御軍のかばねとなりぬ
われ等いま厳かの涯の悲しさを何にまうさむや涙ぞたぎつ
ひとりだに生きのこらじと打たえしすめら御軍のたましひぞこれ
かなしさに直に一つなる心にて今こそは哮べわが雄たけびを

各誌七月号においても、アッツ島玉砕をモチーフとした文章が発表されていく。尾崎士郎「一文学者の言葉　アッツ島死士の霊を弔う」（「新潮」）、神保光太郎「歴史　アッツ島の英霊に捧ぐ」（「文藝」）、横光利一「アッツ島を憶ふ」（「改造」）などである。

アッツ島玉砕は、個人／文学者双方の視座から、太宰治にとっても重い意味をもつ出来

【文化】

▼5月

・18日、日本美術報国会創立。

・「少國民文學」創刊。

・大東亜文学者決戦会議開かれる。

▼7月

・21日、日本文学報国会主催によるみそぎ錬成会開催。

▼8月

・22日、島崎藤村没。

・25日、大東亜文学者決戦大会（～27日）。

・31日、文化学院、強制閉鎖となる。

・「文學報國」（文学報国会機関誌）創刊。

事であった。山内祥史『太宰治の年譜』から、当該箇所を次に引いておく。

〔昭和十八年〕五月二十九日　夜半アッツ島の日本守備隊山崎部隊が全滅した。戦死した隊員二千五百有余。翌五月三十日午後五時、アッツ島部隊の玉砕が大本営発表された。八月二十九日、新聞で三田循司の戦死を知った戸石泰一が、「うわずつた手紙」を書いて知らせてきた。二階級特進で陸軍兵長であった。最後まで彼は最下級の兵であったのだ。「暑い夏の日のことだった」と回想している。

戸石泰一と三田循司は太宰治の愛読者というだけでなく、交流もあった。その戸石が知らせる通り三田がアッツ島で戦死しており、つまり太宰にとってアッツ島玉砕とは、身近な者の死であり、そのことを通じて戦局を直接的に体感する出来事でもあったのだ。三田と戸石という二人の青年のことを、太宰は後に「散華」（「新若人」一九四四・三）と題して小説化することになるが、ここには戦時下における創作が、戦局と不可分であることや、現実的な諸条件の中で公／私の距離が狭められていく傾向を読みとることもできる。

ここで、この間の太宰治の文学活動を振り返っておこう。

「新潮」五月号に辻小説として発表した「赤心」は、その後、日本文学報国会編『辻小説集』（一九四三・七、八紘社杉山書店）に収録される。「八雲」第二輯「小説戯曲篇」に発表した「帰去来」は、太宰治を彷彿とさせる主人公「私」が一〇年振りに故郷（青森）に帰郷する物語であるが、ここにも戦局やそれを支えたイデオロギー（故郷の再発見）との切り結びがみてとれ、それは公／私の合一化という文学場の動向とも共振している。

また、九月刊行予定の『右大臣実朝』（錦城出版社）について、芳賀檀が「こんど太宰治が『ユダヤ人実朝』を書いた」と放言したという揶揄的な噂話は、八月一〇日頃の出来事だとされている。この噂話自体、文学者の政治的スタンスや言動が、戦局と連動した文学場にはりめぐらされた緊張感の中で、過剰に意味づけられていく状況ゆえのことであったろう。こうした状況が、別のかたちで現実化すると、太宰治「きりぎりす」が章克標訳

【代表作】

▼5月

・菊池寛「海行かば」（『主婦之友』）

・太宰治「赤心」（『新潮』）

・田中英光「少年支那兵」（『新文化』）

・山田清三郎『建国列伝1』（満洲新聞社）

▼6月

・岸田國士「かへらじと」（『中央公論』）

・中村地平「馬来人サーラム」（『文藝』）

・太宰治「帰去来」（『八雲』）

・金子洋文『菊あかり』（有光社）

▼7月

・榊山潤「特派員」（『新潮』）

・呂赫若「石榴」（『台湾文學』）

・中島敦「李陵」（『文學界』）

・日本文学報国会編『辻小説集』（八紘社杉山書店）

▼8月

・大林清「マライの虎」（『少年倶楽部』～19年7月まで）

・里村欣三「青年将校」（『中央公論』）

・日本文学報国会篇『大東亜戦争歌集』

「蟋蟀」として『現代日本小説選集1』（太平洋書局／未見）に収められることにもなる。

他に、やはり若い愛読者との間に、後の文学活動に繋がっていくごく私的な出来事もあった。「木村重太郎宛太宰治封書」（一九四三・七・一一）によれば、この年の七月一一日、自殺によって果てた木村庄助の遺志によって日記全一二冊が太宰治のもとに送られてきた。『パンドラの匣』（一九四六・六、河北新報社）はこの日記を素材としている。

最後に、文学者に対する時局の影響として、検閲の問題にふれておく。

「中央公論」誌上で、一九四三年一月号から連載が始まった谷崎潤一郎『細雪』は、第三回掲載予定の六月号で、「自粛的立場から今後の掲載を中止」（編集部「お断り」）とされ、連載中止を余儀なくされた。さらに、「中央公論」六月号に発表された岸田國士「かへらじと　日本移動演劇連盟のために」が、やはり陸軍報道部の干渉を受ける。松下英麿『去年の人　回想の作家たち』（一九七七・八、中央公論社）には次のようにある。

その［「かへらじと」の］見本刷りを陸軍報道部に届けると、当時総合誌の担当であった杉本という少佐が一読して激怒した。すぐ電話があって、編集部長を大本営報道部に呼びつけて、「日本が興亡浮沈の瀬戸際にあるとき、こういうだらしない芝居をのせるとは何たることだ。海に山に死闘をつづけている皇軍の規律は、こんなものではない。これは明らかに国民の士気を減退させるものだ。かかる作品を掲載した雑誌の発売を許可するわけにいはゆかぬ」ときめつけた。

結局は削除となり、事実上の発売禁止となった「中央公論」は、次号で休刊となる。

この間の太宰はといえば、「改造」七月号掲載予定で執筆した「花吹雪」と、七月頃「日本読書新聞」掲載予定で執筆した「革財布」が、いずれも掲載されずに返送されていた。後に、前者は『佳日』（一九四四・八、肇書房）に収載され、後者は「日本医科大学　公団時報」（一九四四・一・二五）に掲載された。つまり、太宰にとっても、書いたものが予定通り発表されるわけではない程度には、時局は迫ってきていたのだ。